



栄西禅師生誕 880 年記念
「喫茶養生記」初治本成立 810 年記念

建仁寺 栄西茶会



開山千光祖師明庵榮西禪師／建仁寺蔵

茶は養生の仙薬なり。

延命の妙術なり。

山谷これを生ずれば、その地神靈なり。

人倫これを採ればその人長命なり。

ご挨拶

我が国に宋代の茶法をもたらしたのは、大本山建仁寺の開祖栄西禅師です。本年は栄西禅師ご生誕880年の節目ですが、その栄西禅師によって書かれた「喫茶養生記」の初治本は1211年(建暦1)に成立しました。今年は810年目を数えます。

「喫茶養生記」には上下巻に分かれており、「茶と桑」の効能などが記されています。その中で「茶者養生之仙薬也。延齡之妙術也。」(茶は養生の仙薬であり、人の寿命を延ばす妙術を具えたものである)と栄西禅師は伝えられ、後の世の子孫の健康のために認められました。

現在、

コロナ禍の中で、だれもが耐え忍び生活が様変わりしました。当たり前の生活が当たり前でなくなり、今までの生活が如何に幸せであったかと痛感した日々を我々は過ごしてきました。

「建仁寺 栄西茶会」は、小堀泰巖管長猊下から賜った厳肅な会名です。今一度、栄西禅師や喫茶養生記に思いをはせ、健康や茶の文化に感謝する機会になればと思います。

お茶会に集える喜びと、そして催せる喜びの双方により、この「建仁寺栄西茶会」は成り立ちます。

今日この日を各々方と共に喜び合い、共に一服し、感謝する一日となれば幸いです。

心の安寧と世の太平を願ってやみません。

合掌

主催者一同

京都市登録無形民俗文化財

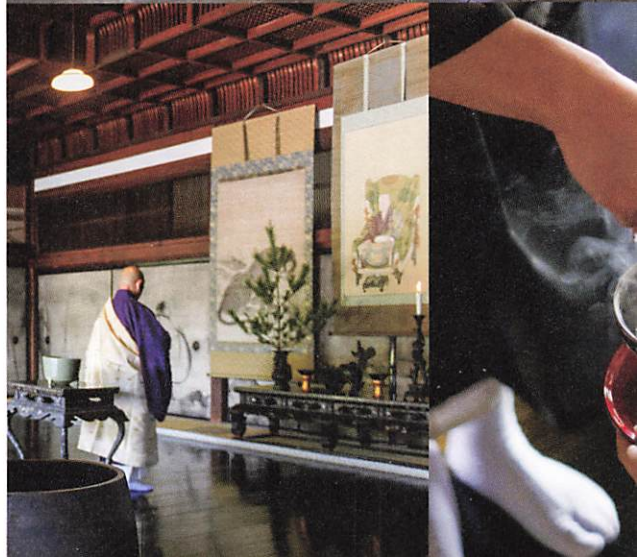
よつがしら さ れい

建仁寺 四頭茶礼

(平成24年3月30日登録)

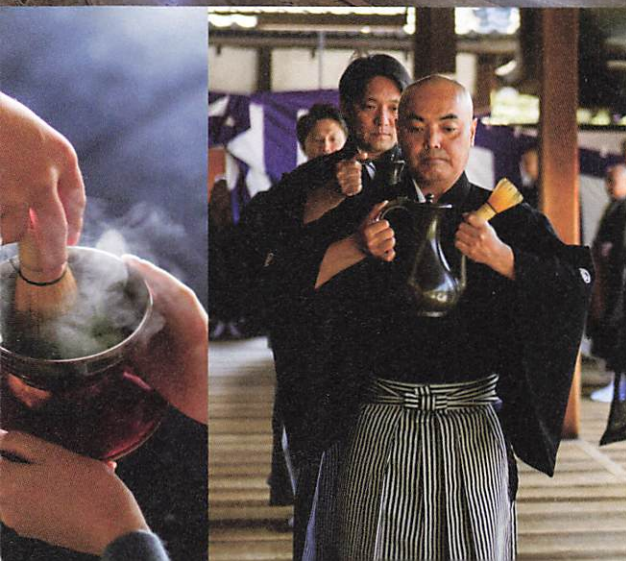
建仁寺の四頭茶礼は、茶の湯の成立以前の禅宗寺院における喫茶儀礼のなかでも、茶道以前、唐礼から畳の上での坐礼への過渡期の形式を伝えるものとして貴重であり、起源は中国南宋の時代、栄西禅師が禅と共に日本に伝えたと言われる。江戸時代には開山忌の食事儀礼の一部として行われていたが、昭和29年より、栄西禅師の降誕会(毎年4月20日)に茶礼のみ独立した四頭茶会となった。当時は、特別にお招きした客にだけされた茶であることから特為茶といわれ、一般大衆にはだされなかったが、この時より広く一般に知られ、現在、盛況を極めるほどとなる。

四頭茶会は、午前8時より催される。方丈の室中に一山の僧が入室し、建仁寺管長猥下ご導師のもと、栄西禅師を偲ぶ法要が厳修される。僧が退室した後、参加者が室中へ案内される。その際、正客すなわち



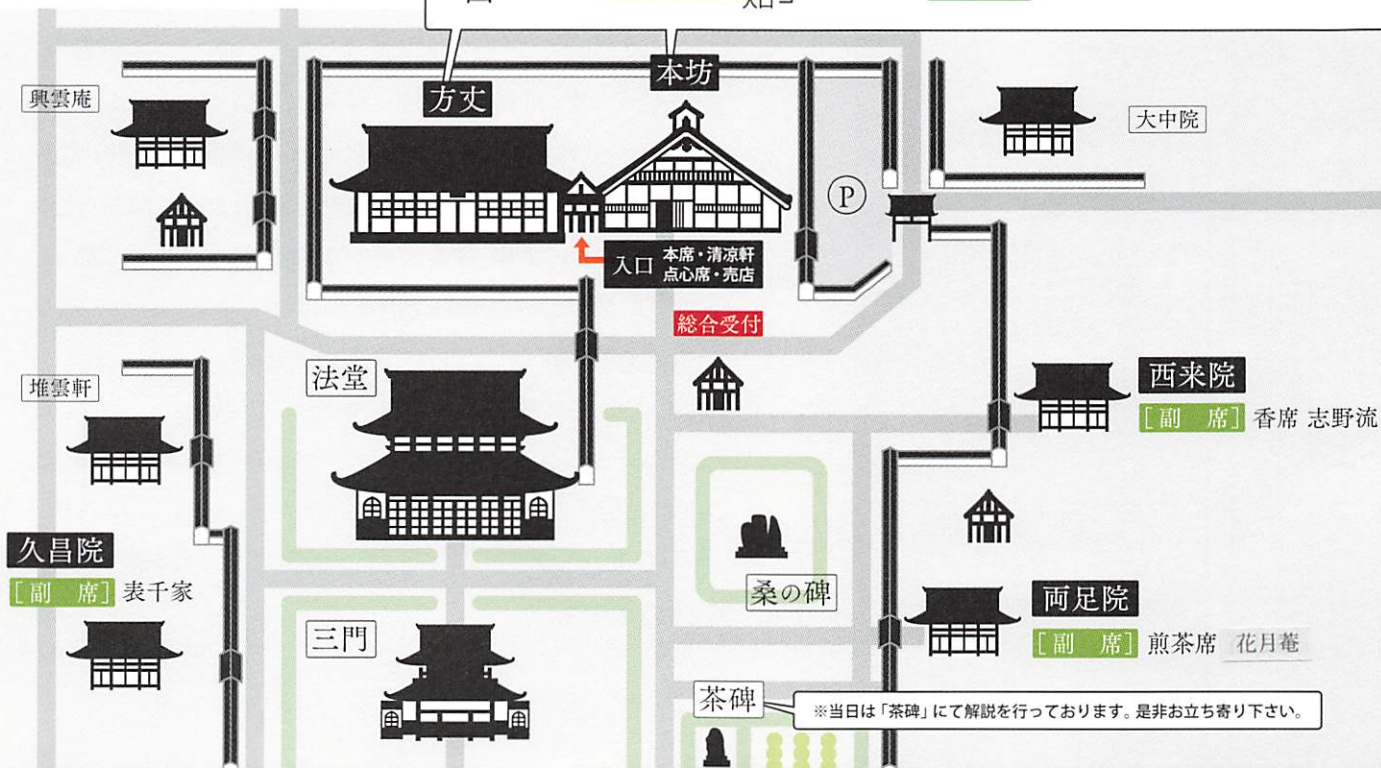
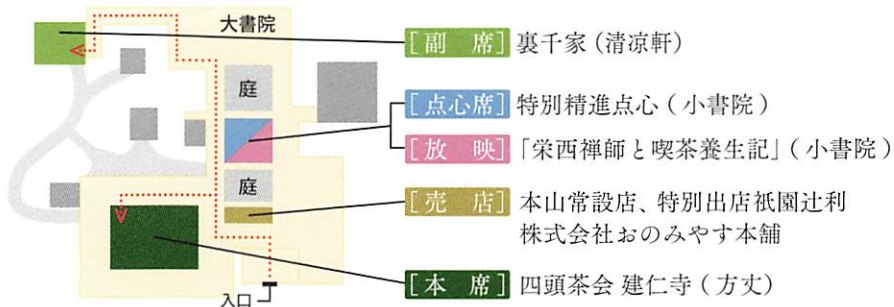


四主頭4名を先頭に、それぞれ相伴客8名が従い4列で計36名が入室し、コの字形に廻らされた畳に着席する。四主頭の席には、座牌と呼ばれる裂が置かれており、四主頭はそれを4つに折り畳んで自分の隣におく。一同が着席すると、侍香の僧による献香のあと、座屏が室中から外に出され、給仕がはじまる。まずは四主頭への給仕で4名の供給の僧が紅白の紋葉・椿の葉に載せた「ぴりコン(醤油で炊いた蒟蒻)」を盛った縁高と、抹茶入りの天目茶碗を、それぞれ四主頭へ配り、退出する。次に供給は、板盆に縁高を8つ載せ、それぞれ8名の相伴客へ配って退出する。次に、曲盆に抹茶入りの天目茶碗を載せ、相伴客に配って退出する。その後、四主頭から相伴客へと順番に点茶をおこなう。その作法は、まず供給が、口に茶筌を挿した浄瓶を持って入堂し、客人が捧げ持つ天目台に載せた天目茶碗に湯を注いで茶筌で点て、客はそのまま喫する。その際、供給は正客の前でのみ胡跪(左立膝)し、相伴客の前では中腰のまま点てる。供給は、逆の順序で縁高、天目茶碗を引き、一同は退出する。この一席は、およそ20分程度で、これが二十三席、繰り返し行われる。



境内茶席見取図

本坊・方丈内見取図



2021年12月14日(火) 建仁寺 栄西茶会

大本山建仁寺

[御法要] 8時30分～

[一席目] 9時開始～ [最終席] 16時終了

感染防止対策を行い開催いたします。

[主催] 一般社団法人文化継承機構

[特別協力] 大本山建仁寺

[協力] 祇園辻利、矢尾治、株式会社おのみやす本舗

[後援] 文化庁、京都府、京都市



お問い合わせ：一般社団法人文化継承機構 TEL:075-746-5234 FAX:075-746-5241